

クラス参加資格とリレーチーム編成

武石雄市

向上するジュニアに挑戦の夢と希望を！ 全日本リレーのチーム編成の改善

規則・規定の改定でジュニアクラスの参加意欲が失われた。大人の視点以上に技術向上しているジュニアの救出。強者の論理だけ通用している全日本リレー。弱者を置き去りにする組織では離脱が出るだろう。

クラス分けと参加資格

競技会の募集要項を入手しその競技会に参加申し込みをするに当たり、皆、其々の都合と記載されている条件や要素によって申し込みを決心している。その条件・要素が個人毎に重要度が異なることは当然である。競技形態や種別、レース距離による分類や走行可能度等のテレイン情報で決心するもの、期日や場所、参加料、交通手段や宿泊の可否で決心することもあるでしょう。

これらのほかに決して無視できない条件にクラスと参加資格があると思う。どんな競技会にも無選別で参加できるものもいると思うが、大抵は先ず自分が参加できるクラスの存在を確認することから申し込みの検討を始める。

ここでは平成 19 年 5 月 26 日改定された「日本オリエンテーリング競技規則」(以下競技規則と記述する)と関連する規程の特に 20 歳以下(以下ジュニアクラスと記述する)のクラスについて考えてみたい。

旧競技規則では性別、年齢別クラス分けとして原則的な条項の記述があったが、改定された競技規則ではその条項を運用に関するガイドラインに移行した。ガイドラインに移行したことはよいとして「20 歳以下の競技者は、20 歳を上限として 1 ランク上の年齢用のクラスに参加してもよい」(規則 4.1.4)と明文化したことに疑問を呈する。

これはジュニアクラスの参加者を技術的にも体力的にも低レベルと決め付けた明らかに大人の発想である。最近に関わらず他のスポーツでも内外で時としてジュニアの活躍が世間を賑わすが規則の年齢制限に阻まれてオリンピック出場が叶わなかった種目がある一方、出場が叶ったのびのびとその能力

を發揮しているジュニアがいる種目もある。

運用に関するガイドラインではジュニアクラスについて小学生、中学生、高校生、大学 1・2 年生の学年を基本としていると説明しているが、1 ランク上のクラスに参加できるのは当該クラスの最高学年のものに限定している。これでは能力・体力があって全日本大会の M/W20E を目指しているものにとって、とてつもなく重い障害となり小学生は論外としても中学生と高校 1・2 年生は上位のクラスに参加資格の機会を与えられていないことになる。

競技規則は国際オリエンテーリング連盟(以下 IOF という)の競技規則に基づき、定めている(2.1)が、IOF 規則付録 1 では、「20 歳以下の競技者は、その年度の終わりまでに達する年齢のクラスに属する。彼らは、21 歳までの年齢が上のクラスに参加する権利がある」(1.2)となっているのに、改定された競技規則ではその権利を剥奪し、国内ジュニアクラスの上向き意欲を減退させている。現に国内でも高校 1・2 年生や中学生が大学 1.2 年生と同クラスに参加して上位の順位を占めるものが複数現われている。

また、全日本 M/W20E の出場資格についても改定されたが、改定前の競技規則・規程によって獲得した E 資格が改定後の規程が適用され数名の資格が消滅された。オリエンテーリングは E 権がすべてでないことは十分承知しているが、物言わぬジュニアに代わって規則・規程等の適用適正化を望むものである。

ジュニアは日々成長し、真剣に向上を目指して精進している者の成長もまた早い。中学生でも JWOC 出場に挑戦と希望を与えるためにも関係者は朝令暮改の指摘を恐れることなく、再改定を検討するに当たっては面子に拘ることなく、また、言い訳でお茶を濁すことなく、**オリエンテーリング普及発展のため該当規則等の早急な改定に着手してもらいたい。**

ジュニアにその制限が撤廃されたからといって猫も杓子も挙って上位のクラスに申し込むことはない。何故なら難易度が上がりレース距離が伸びることは十分承知しているので、挑戦することを捨てないまでも彼らなりの適正なクラスに申し込むものが大半である

う。

因みに 21 歳以上のクラス参加資格について誤解のないようにしておくが、彼らについては「21 歳以上の競技者は、21 歳を下限として若い年齢のクラスに参加してもよい」(4.1.3)と従来どおり明記されているのでなんら問題はない。



東尋坊パーク O 大会を走る武石雄市

全日本リレーチーム編成

10 月 7 日に開催された平成 19 年度全日本リレー選手権大会は第 16 回を数えるまでになった。思えば平成 3 年「石川国体」を契機として団体出場を目的に「都道府県対抗リレーオリエンテーリング大会」が金沢市で開催され、それを翌年度から発展的に「第 1 回全日本リレーオリエンテーリング選手権大会」としてから 16 年を経て「第 0 回」の石川県に里帰りしたわけである。

山形県は開催の趣旨に賛同し「第 0 回」を始め当初の数回は参加できたが次第に会員数も減りチーム 4 名の編成

が困難になり、その後3名編成となっても同様で複数県の連合チームが可能となっても永い間参加の機会が失われていた。

その間、競技者登録数の多い会員はM/W Eはもとより全ての選手権クラスに複数チームの参加が認められ、中には5チームも参加している会員も見られた。

今年度山形県も、ジュニアの成長と相まって僅かばかりの会員のモチベーションを上げるためにも選手権クラス数クラスへの参加を試みた。

しかし、9クラスもある何れの選手権クラスにも3名のメンバーを単独で編成することは出来なかった。

前置きはそのくらいにして、全日本リレーに参加希望の選手がいる超弱小協会を代表し、今後の連合チームの編成について次のように提言します。

カッコ内はその意図と説明です。

・ チーム編成について

1 会員が単独でチームを構成できない場合、隣接もしくは同一ブロックの会員による連合チームを参加させることが出来る。

(2県の文言は廃止、3県の構成を認める)

2 その際、単独でチーム構成している会員であっても連合チームの構成会員となることを阻まない。(配点は問題は強者会員の論理であって、弱者会員は参加できる意義を優先する。参加チームが増加することはJ O Aにとって収入増となる)

3 開会式の選手団紹介は連合チームは同一ブロック単独チーム紹介に続いて紹介する。

(隣接会員や同一ブロック会員と連合チームを構成している場合、ブロック相互の連帯感に作用する)

4 連合チームが隣接会員、同一ブロックで構成が困難で、且つ参加希望する会員はチーム構成の制約(隣接または同一ブロック)を解除してチームの構成を認める。(他のスポーツ種目でも日本選手権大会ではそのようなチーム構成が認められている。各選手権クラスの参加資格が年齢により厳然としているのでC C 7とは異なる。国民体育大会のように得点による総合優勝方式は、仮称ですが「全国都道府県対抗リレーオリエンテーリング大会」と名称を変更するべきでしょう)

・ 参加料について

1 単独チームが1チームの場合、

M/W Jクラスを除き各クラス現在の参加料金とする。

2 M/W Jクラスの参加料金を他のクラスの50%程度に引き下げる。(学連の登録者数も減少している状況を鑑みてオリエンテーリングの将来は楽観できない。全日本リレー当該クラスの参加チーム数は、当該年齢のJ O A競技者登録数に比較して学連大会やC C 7の参加数より極端に低いことが分かる。これはモチベーションの違いも当然ですが参加料金が他のクラスと同一料金であることにも原因があると考える。公認大会や一般大会の参加料金がジュニアクラスを低額にしている参加者誘発策をとっていることからして、全日本リレーにもこのクラスの低額化を実現して参加チーム数の増加を試みる。ジュニアチームの参加が増加することは技術レベル向上を目指した一般大会の参加者増が予想され、短期的に低額化による収入減の影響は最小限に回避でき、むしろ長期的スパンから見ると、危惧されているオリエンティアの減少に歯止めが掛かるのではないかと考える)

3 M/W Jクラス以外のクラスに単独チームを複数参加する会員にはチーム数に比例して割り増しの参加料金を徴収する。

(所謂富裕税の発想である。弱小会員(例として山形県)のチーム参加料は県(会員)代表であっても個人負担が現状である。複数チームの全ての参加会員が参加料を負担しているとは確認できないが年度の会費納付も滞っている困窮会員より、これも財政困窮のJ O Aに貢献する意味で理解が得られるものと考えた)

主催大会の連接開催

J O A主催大会は全日本リレー選手権大会と個人の全日本大会だけになった。

一方、公認大会は今年の試行期間を経て三つのカテゴリに区分されて一時期より増加しているように見える。

選手権を目指しているものにとって公認大会数の増加はE権クラス資格のチャンスが広がり歓迎する現象ではあるがそうは簡単でない。公認大会申請の大半がカテゴリSなのでエリートクラス出場資格取得の対象から除外されているのである。

カテゴリSはパークOやスプリント競技を対象としていて、トレイン状況

や地図調査、運営者の面でコスト軽減と背伸びすることなくクラブ大会の開催気分で運営できるからであろうと推察できる。関係者の規程改定もそれを意識したのであれば1年目にして成果があったものと評価しているかもしれない。

それならばJ O AとしてスプリントやパークO参加者の年度選手権者を決定する手立てがなければ、エリートクラスを設置しても選手権大会のエリートクラス出場資格もなく、選手権者を選出できない片手落ちの状態となっている。それを解消する目的でスプリント選手権大会のみ別の時期に開催することには賛成するわけにはいかないが、この状態を改善するため、個人の全日本大会または全日本リレー大会の前日のスプリント選手権を接続しての開催を提案する。

スタッフやトレイン等の運営は前述したようにロングやミドルのように多くの手数は省けるのでちょっとしたクラブなら単独で主管できると予想する。事実、前項で述べた石川リレー大会の前日に隣接の福井県協会がスプリントの公認大会を行ったことでも証明できるでしょう。

そのことはロングであれリレーであれ、単日開催と違って多くの参加者が宿泊を余儀なくされ、地域への経済的相乗効果も伴い、開催する自治体等も歓迎することである。関係者の前向きな研究・検討をお願いしたい。

(山形県協会 武石雄市)